



# - Link “新風”

Vol.44  
(通算 第137号)



まだまだ暑い日が続いてますね。朝晩はだいぶ過ごしやすく  
なってきましたけど、新しい部署もでき  
新しい期四十一期が始まりました。新しい部署もでき  
社員一丸となつて頑張っていきましょう。



『屋久島の主』

## 『今月の表紙』

屋久島に自生する最大級の古木、「縄文杉」です。  
以前、友人と旅行に行った際に撮影したものです。なんでも、樹齢 約3000年とか。  
我が社も9月から41期。みんなで力を合わせ、この縄文杉のように大きく成長し、  
永く繁栄していきましょう。

撮影日時：2008年5月4日 撮影者：臼井克幸

## 社長の記事

新たな歩みをはじめよう！



虫の音が聞こえはじめるなど秋の気配をすこしずつ感じ取るこの季節は、決まってわが社の新しい期の始まりです。

設立から41年目を迎える今期は、40年間という過去の実績の集大成と位置づけ50年、60年に向けた新たな旅立ちへのスタートであります。経営方針は、9月3日の年度方針発表で示しますが、目標を達成するためには、我々はやるべき当たり前のことは何かを再確認し、意識を変え、やり方を変え、実践していくのみです。

私も、40年間粉体機器メーカーとして生き抜いてきました。お客様が製品の価値を見だし購入していただいたことは大変ありがたく感謝すると同時に、これからは時代に即した製品創りで社会に貢献していかななくてはなりません。改善しなければならぬ事項は数多くあり、それだけ会社がよりよくなる源であります。知恵を出し、汗を流し、粉体機器メーカーとして確固たる地位を築いていきたいものです。

経営は、安全第一です。重大事故を起こしたら会社は危うくなることを肝に銘じなければなりません。絶対に事故を起こしてはならないし、安全管理がマンネリ化に陥らないようにしましょう。8月17日天竜川で川下り船が転覆し5名が死亡した事故を、ともすれば他人事のように思って忘れ去ってしまっはいけないでしょう。2歳児が死亡、その母親が「助けてあげられなくてごめんね」と号泣したことを忘れてはいけない。暴れ天竜の異名をとっていた天竜川は、船明ダムなどが建設され水量も安定して渦も小さく危険はほとんどなくなって、外から見れば穏やかで水量も少なく見えるそうです。昭和23年からはじめた川下り船は過去60年間事故がなかったのに、事故など起こるはずがないと誰もが思っていたはずですが、まさかの事故が起こってしまい、しかも悲惨な結果でした。当然だが、ひとたび事故が起こるとその原因が追求され情報開示されることになる。いわく、12歳未満が着用しなければならない義務すら守られていなかったのに、運営会社は見ても見ぬふりをしていました。かき取りに当たっていた船頭は、2ヶ月前に就任したばかりで経験が浅かった。転覆を想定した訓練や操船教本もなかった。かつては、若い船頭見習いにはベテランがついて操船させ、難所のところは仕事を終えてから何度も通らせ経験を積ませていた。運営会社は、鉄道経営で累積赤字が膨らんだが、積極的な営業活動や経費節減をすすめ徐々に経営成績を上げていた。川下り船は本業でないから力が入らず川を甘く見ていた。安全に対する感覚がマンネリになっていた。社長は、救命道具の着用義務を知らなかった。川の難所は、大きく強い渦が横だけでなく縦方向にもできる。…このようにたくさんの原因と思われる項目が挙がってくることを知るにつれ、起こるべきして起こった事故ということになる。我々は、発生した他の事故事例を教訓とし、いついかなる時も公私共々最悪の事態を想定し、対策を怠ってはならないと強く決意しなければなりません。

生産管理システムの強化として2006年から取り組んできた5S活動の成果は、目に見えて成果を上げていますが、後戻りは絶対イヤだとし、今後は心の5Sで「魅せる工場」づくりに邁進していきたいものです。会社をはじめ組織は人の集まりですから、気持ちを一つに結集すれば大きな力となり、反面バラバラな気持ちですと脆いものです。「社員は経営参加意識をもとう」という言葉をしばしば耳にします。なかなか難しい言葉ですが、その根底に誰もが持っていなければならないことは、よい会社にしていこうという心根と行為であろうかと思えます。ゴミを跨がないで拾う、汚れを見たら拭き取るとか実に簡単な行為であり、思いやりと感謝の念を持って日々を過ごす等々当たり前のことを実践することにあるのでしょうか。難しいことはやらなくていい、当たり前のことを愚直に行動していくことが肝要かと考えています。

この1年間が将来に向けての実り多きスタートとなるよう頑張りましょう。

社長 赤堀肇紀

